

第七十回

〇先生賞候補作品

本年度の〇先生賞選考では、受賞作品のほか候補作品二十一篇が決まった。このうち優秀作品四篇、佳作として八篇をそれぞれ抄出し掲載する。

優秀作品 キヤタピラ 白川 ユウコ*

更地にはなにかあったかにんげんの記憶はわはわたんぼの花こいびとに逢いにゆくがに粧いてわれはときどき東京へゆくようこそとおおらせいとうを咲かせ世田谷線を線路は通す西友で四人の女子が土鍋買いわが八畳の部屋に集いき赤堤商店街をくだりしよ男に五キロ米を買わせて飛行機で恋人が来た夏の夜は窓あけていてすみませんです鍵ちよつと貸してと行って合鍵を勝手に作る そいうところうとうととこたつにふたりとおい愛とつくにとりこわした恋です

プリムラの庭をみていた濡れ縁にデリーで買ったサンダル置いて大家さん卒寿白寿を超えたらん大きな白い犬がいたなあ六万を盗んで去ったあの空巢しあわせですか息してますかキヤタピラよまわれウンポで均すべしだれにも話してない話木造のアパート薄きドア閉めてとしつきに朽ちたり鉄の鍵〈鳥さん〉は時が止まった釜めし屋うすいしゃもじでおこげをはがす忘れたねいまはマツモトキヨシだね友が泣きに来たマクドナルド午後七時山手線は退勤のひととこれから出勤の人

黒服につきまとわれる歌舞伎町最近どうなの？とやり返す

おもしろいあたし絶対なものにもなれないなんておもわなかった MYCITY 無しさくらやがコマ劇が無し新宿の東口には

建物は建物の墓建物の死を敷いて建つ都会のビルは

グラビアが破れたように泣きながら帰った道は道ごと消えた若さとは始発電車を待ちながら空をながめたポカリスエットなにもないわけではないな人んちとベルフラワーの鉢はあったな青春は更地とされて家建ちて白髪を染めてわれが見にくる

優秀作品 びばのん 清水 美 里*

「お大事に」言われなくなり「お大事」も言われる前にやらなきヤダメか おかあさん失格なんて言われてもパンツ靴下朝日浴び干す

萩の湯の丸い鏡の内側のふたつの乳房だけが平和だ

ああ今日はりんご風呂の日あちこちでりんごの丸を包む手も丸湯船とうこの世の浅き極楽を見下ろし啜う富士の白雪

ロッカーの鍵のバンドの跡残る手首ぶらさげ(一回休み)

寿限無寿限無やれば五分で済むことこの海砂利水魚のめんどくささよ診断書、休職届 名も知らぬ人らの電子印捺されゆく

へふりだしにもどるのマスを踏んだゆえ常磐線直通千代田線
強風に裏返る傘恥ずかしい私のせいじゃないじゃあないの
談話室ニュートキーヨーのレシートに雨水染みて談話が滲む
栄湯の前の自販機八ヶ月麦茶のボタン壊れたまんま

（かわいい）が正中線ではつくりと割れる暖簾に住まぬき猫
骨に手が当たると気づく九キ口の重みを失くし陰部洗えば
びばのんの語源は不明びばのんはバベル崩壊以前のことは
外気浴すれば身体はハモニカとなりてゼーと肋よく鳴る
なおしてもなおしてもなおずり落ちてくる肩紐のまま隅田川
どこからが未遂でしょうか水面にひとつりんごを落とせば跳ねる
わたくしの気はわたくしのものなので持ちようはわたくしが決めます
会員制スナックちはるのドアが開きわずかに覗くちはるの箒
燃やされてしまうのやだな碎かれてしまうのやだな　されこうべ　白
言いかけた「かわいそうに」をひっこめて「心が痛む」に心がなおす
死ぬのなら水に死にたし浴場を見渡せばどこまでも水、生
行きよりも帰りが軽くあるように水筒のお茶がごと飲み干す

優秀作品 時間に触れる 真島陽子*

黒き畝ならば畑にそよぎたり野菜の苗のしずかなる声
やわらかきほうれん草の茎引けば出せぬ手紙を破る音する

自転車は若葉の坂を走って　突き進まずにいられぬ時を
百合つくる畑仕事を帰り来て義母はあかるく「つかれた」と言う
コーヒーに砂糖とけゆく速さかも　くるりくるりと時間に触れる
いらだちの飛沫を浴びて梅雨の日の塩辛すぎるチンジャオロース

亡き義父の席にすんなり短パンの次女が座って空く次女の席
すこやかな義母は子どもに風送る「動け」「働け」「いっぺええ」と
新盆の義父の遺影にそなえたる水惑星の特大西瓜

「ただいま」も言わずに部屋へ入りゆく十九時半の中学生は
たましいが深呼吸して憩いおり中学生のむすめのぬむり
予定表消すとき浮かぶ　美しく板書を消した数学教師
退職の若き職員じやりじやりの不満まぶしたドーナツ配る
馴染めずに職を離れる若者の心よ床のクリップひろう
素粒子はわたしの体を通りゆく一昨日、昨日、今日の刹那も
しなやかなもみじの幹に両足を乗せて風受く森のサーフィン
八人の孫と写真を撮りし父ひとり離れて遺影決めおり
下駄箱のなかの鋸　わが父の道具がありきわが生まれ家
わが父に家業継がせずわが祖父は引き取りし子に棟梁任す
棟梁の伯父は空から家々を見ているだろう出棺の朝
ぼた雪が傘に降り積む音のして子のアパートの引越終える
ただひとつセブンイレブンあることの雪降りしきる町のしずけさ
自己肯定しない、できないのちあり　ねじれて伸びているチューリップ
庭の雪まだらにのこる黒土にすてた葉わさび芽を出している

優秀作品 言葉はちから 斉藤淳子

生まれたるばかりの雲かあさかげに銀糸をまとふひと筋が見ゆ
驚の求愛のこゑ一途なり宝石の喉をふるはせながら
さくら色のワクチン証明たづさへて旅に行きたりさくら咲くころ
さめざめと泣く空のした出勤の車は速度を守りつつゆく

マスクせず話しかける同僚の顔のメモリを微修正する

「よろしく」と礼をしたればまだマスクとらぬ生徒らちさく頷く

デジタルの教材使ふ生徒らをとほく見てをりふるい黒板

半世紀若い生徒の微笑みはうれしのおまけ今日ももらひぬ

〈鯉料理(給食無料に!)〉(家族葬)帰路の車窓にたどりつつゆく

目印の(酒)の看板はづされて無機質な空ひとつ生まれぬ

ダンブカー蟻のごとくに列なして残土を運ぶいづこへ運ぶ

また重機増えて険しい貌になるリニア新駅予定地あたり

風景にふかく繋がる人間のころろ揺さぶり開発すすむ

いくたりのいのち奪ひてなほ雨を降らす文月わが生れ月

同齡の三人食べつつ順番に噎せたりどこかで死が見てゐしや

忘却の河に落ちたか見当たらぬ靴下を恋ふ梅雨冷えの足

丹念にスクワットする還暦を越えて上りも下りも怖い

正体のわからぬものに急かされてウォーキングに出る雨空の下

花柄の傘をひらけば歩みつつ花の下なるころろやすらぐ

ここかしこ色を濃くするあぢさゝるが行方不明者の数ほど咲けり

たひらかな水にオイルとなる腕かひなこの身ひとつを浮かべてあそぶ

「人間が好きだから」と語る馬場あき子九十五歳の言葉はちから

醤油派を返上しさらり塩をふる梅雨の晴れ間のサニーサイドアップ

合算し五円ほどまた上がりしとトーストにジャムを塗りつつ思ふ

佳作 そこにゐし人

吉田史子

俺は弱気なところがあるんだと恥ぢらふやうに笑ひしあなた

はなれ住む娘はビデオ通話にて父に見せたり婚姻届

弱りたる心臓と肺 最新の機器が命をつなぎてをれど

子とわれがそろひしのちに力尽きぬありがたうあなた待つてくれて

機器全て0を示しぬこぼれたる目尻のなみだ舌でぬぐへり

壮大なやさしき嘘につつまれてありしや意識不明の日々は

左頬のほくろのいと亡骸となりたる君に口づけをする

苦しさと痛みを解かれ君に降るアフアナシエフ弾く幻想曲は

棺のふたずらして額に口づくるわたしを見るな 明日はお別れ

母校なる高校、大学の前を過ぎ君の棺は運ばれてゆく

いつもそこにゐし人がゐぬアトリエに入れば舞ひ立つかすかな埃

入院の前夜もコーヒー淹れてくれし普通の日々ははるかに遠し

父のこと語りてゐたる長男がふいに泣き出づ堰切れしごと

空気がとゆるみて風の吹くごとし君の遺影にとどく木漏れ日

パピコ食べる相手がゐなくなつちやつてわたしはひとり五月の庭に

くれなるの濃き撫子を供へたり君のお墓の差し色として

不意打ちの涙に遭ひぬ本棚に君の書きたるメモを見つけて

さうかもうあなたはゐない きゆるきゆると回転椅子はまぼろし乗せる

わがままな妻とやさしき夫といふ定型の中なかからみあふ糸

死を賭して君がわたしに残しくれし「時間」と思ふ目を閉ぢおもふ

佳作 夏男

三沢左右

入院の夫の靴を磨く朝すこやかに戻るを疑はざりき

治るための検査入院と信じゐて君を送りき笑顔とともに

あざらかにたにしのたまごかたまりて曇天なれば影おぼろなり

どんななかほしてたつけなあ ふつかごに来る親族の「素顔」をたどる

輝りながら真夏の坂を車らがぎらんぎらんところがり来たる
京都より妹夫婦姪二人父と母来る八月十四日

開店を待つ客四人 電柱に凭れる人石段に座る人

テナントが減つてしまつたビル二階（ボルカノ）に客多き真昼間
隣客がコロナ体験しやべつてる（ボルカノ） 姪はスパゲッチ食ふ

「台風は午後に来るつて」昼食を終へてはやばや六人は帰る

四歳と二歳の姪をあそびせる場所は調べた、しらべてはゐた
脱ぎやすき靴を選び履きたれど脱ぐことのなし六人は帰る

京都には無事に着いたと「」ありまだ雨は降りはじめをらず
おそらくは我が誰だかわからないままに帰つてゆきし姪たち

会食にそなへて買ひしスケッチブックを出さず八月十四日をはる
暴風雨、たぶんにしたのたま「」は無事であるのだらう濡れながら

検索をしてをりダルシマーといふ楽器の音がわからなくつて
あこれか。子供のころの押し入れの内からひびくやうな音、おと

ダルシマーの撥（ばち）ふるへたり父母に言はぬひみつをささやくやうに
のんびりとしたしやべりかたする人を見る のんびりと「くくちびる
しやべるときうく唇さういへば「このとこ見てゐなかつたなあ
虹いづるころには地面かわきけりギターの1弦の切るるまで

佳作 同時代のこと

人 見 江 一 *

拉致なのか、失踪なのか、忽然と姿を消した坂本一家

蒸発や失踪なんてありえない坂本を知る誰もが思う

弁護士の手帳に我が名あり刑事二人が勤務先に来る

犯人を捜査するより弁護士の交友関係あたる県警

北へ行くフェリーの上できみを知る同じキャンプのメンバーとして

「読めますか？私の名前は都子です」きみは大きく名前を書いた

閉山後過疎化の進む夕張を学びの場とするワークキャンプは
グレンデの草刈り終えて夕張のメロンほおばる夕陽見ながら

「新しい読書会の名は結がいい」きみの意見が皆を結んだ

読書会「結」で初めて読んだのは岩波新書の『同時代のこと』
十九のきみが日記に書いた詩は合唱曲に歌い継がれる

母親に宛てた手紙に龍彦の成長ぶりを記したきみは

生きていれば死刑反対を言うだろう坂本堤弁護士ならば
新潟と富山、長野に埋められた弁護士一家眠る鎌倉

立教のキャンパスに植えた紅梅はきみのふるさと茨城の花
都子さんの思いを伝える活動を（都子基金）と名付け開始す

イチゴ食べすっぱい顔をしたきみの写真をしおりの表紙に使う
茨城のきみの実家を訪ねれば奇しくもその日震災に会う

助け合いとも「過」した二日間茨城を発つ震災三日目
『同時代のこと』目を背けずに見てほしい「まつすく目をみて話したきみは

佳作 逃げる

磯 川 朋 美

豚玉の水平保ちゆるゆると今日の帰宅は少し楽しい

前に行く男の赤い靴底がちらりちらりとわれを窺ふ
煙草やめ肺を忘れて息をする便りの無いのはよい便り だ

もう少し未来は拓けてゐたはずでブーケの芯に赤薔薇を選ぶ
順番に子は風邪をひきリスクなど分散しない負けは一気だ

踏ん切りが必要だからもう少し腐るまで待つ冷蔵庫のネギ

何一つ未来は見えず最善を尽くして今夜は肉ジャガにする

哺乳瓶叩き割りたる日の傷の五ミリ隣をまた浅く切る

海中で確かに拾った宝石はすぐに息絶え石ころとなる

わが腹で四人の人の心臓が打ち始めしは恐ろしきこと

こめかみにバナナを当ててウルトラの母になつても力は湧かず

横向きに子らが寝るので横向きにわたしも寝るが 足が寒いな

夕飯を親子丼にしなければ逃げられた鶏 などはあるまい

逃げるなら高さは要らずひと息で飛べるだけ飛べ低く矢のごと

青空を食ふがに雲が立ちあがり白き影濃き夏の陰影

ほんやりと左手首に日焼け跡残して夏はわたしを過ぎる

八号車静岡過ぎてぐずぐずの赤子寝たのでほとと富士山

二つ三つ夢が叶ひて四十の半ばに立ちぬふるさとの丘

三つ四つ想定外の人生に毎夜投下す「命の母」を

空中で止まるトンボと目が合ひてわたしはふいにニンゲンになる

佳作 暁雲

柴田 佳美

さみしさにふと目覚めたりほんたうはお茶碗洗ひに目覚めた夜更け

眼の奥がかつとなるけど夫のコップと塩辛の皿片付ける

離乳食の記念にしてるプーさんの小皿に塩辛のせちやう夫は

リビングのシーリングファンがかきませるくもつた胸底のこゑ

怒らない女であると決めてをりひとりの男愛し抜くため

夫の長わたくしの短リズムミカルにいかはりつつ二十年間

暁雲がにはひはじめる油絵の女の赤き頬のごとくに

灰白き光の釉葉まとひつつ町は静かに目覚めはじめ

世の中に何もなしえず布巾手にさまよつてゐるこの筐底を

筆圧の軽やかな夫のくづし字に似てるとおもふ夜の愛撫は

とほのいてまたちかづいて絶妙なバランスで保つ夫婦の無風

気取つてゐる男をまねて右腕で額の汗を拭ふときどき

街道を走つてゐるときこの体そして心はわたしだけのもの

バルファムが汗と混じつてくるころに暗がりをするわたしの犬歯

青緑色の孔雀が滴つてふたたび孔雀になる水たまり

「雨だよ」とメールしたのにペランダのシーツそのまま干してあり

安定の中におさまり反復の家事の重さにぐらぐらする肉

わたくしの肉をうしなふとき骨は暁の白になりゆくだらう

マティーニのオリーブひとつ逆行し銀の風葉にゆれてゐる

うづくまる獣のごとくに部屋のみ追熟をするメロンひと玉

佳作 文系氣質

水辺 あお

前奏が短くすぐに歌ひ出すビートルズのごと初蟬啼けり

知らぬ間にわがパソコンに忍びこみわがクリックをじつと待つ鰐

テレビ見て新聞読みてスマホ見るとどこかオオタニ勝つてをらぬか

次々とホームラン打つヒーローとミサイルを撃つ無名兵士と

どの人のエゴを許すか許さぬか多数派閥のエゴにて決まる

多数にてすべてを決むる悪しき弊、正すに多数の決が必要

すれ違ふ利那触れたるわが猫の今朝の不機嫌ひねもす残る

わが傘にバチバチあたる雨粒の強き響きは誰の怒りぞ

勝鬨の剣のごとく天を刺すグラジオラスの黄花赤花

機嫌よき鯖猫の振る短き尾畳の上にとどかざりけり

夏の夜の夢の城にて再会すマティスの金魚となりし亡き猫
忘れぬ恋のごとくに現はれぬ冷凍庫の奥ビンの枇杷ジャム
あなたにはこれしかない鉛筆を研いでもらひし十八の冬
身延線窓側に座しただ眺むわが分身を野山に放ち

旅の部屋電気つければわが影が黙つて居たりわれのふりして
今生は夢かとおねる左腕脱皮の前のごとく乾けり

わが歩行まねるがごとしエリザベスカラーの猫の天秤歩き
どのサプリ効いてゐるのか元氣なり今朝も飲み込む五種十二錠
水路より田に流れ入る水の音真夏の午後のしずけさに溶く

佳作 背泳ぎ

松下 誠 一 *

雨の音ふみきりの音 サイレンの音は遠くにあり遠ざかる
まだ味のあるガムを噛む夏至の日の図書館のトイレが埋まつてる
息をするたびにびいびい鼻の鳴るひとの近くで暗記する式
遠回りしなきゃ寄れない公園ですこしだけ懸垂して帰る
夕方に目覚めてすこし遅れると連絡をしてから浴びるシャワー
コンビニの行列に並んで買ったビールを冷えているうちに飲む
焼きそばも牛タンも食いたいけれど行列の最後尾があつち
人混みの土手の向こうで打ち上がる花火を聴きながら食うきゅうり
数年ぶりに会つて花火を見たけれど花火の話しばかりだったな
さすらいの鍵師のような格好で親子丼（並）かきこんでいる
友だちの就活いそがしい夏に区営プールで背泳ぎをする
台風で海の手定が無くなったその日に投げている十ポンド
野良猫の逃げていかないぎりぎりに止まって日本語のごあいさつ

癩癩でなんとかなつたあの頃の痕跡に貼られるカレンダー
でかいかみなりが鳴るたび美容師とワンララー程度の会話する
気が向けば煮込む過程がひつような料理もするしあいさつもする
廃線のふみきり閉まることのなくもつかい好きになつてください

佳作 七つの頃へとおりやんせ 奥 呂美生

欄干にからすが三羽とまりゐてものがたりからまだ覚めぬ朝
目のまへにわれは見てみきわづかなる命をしるす曾祖母の息
弔ひの家にからすが群れてゐた昔はみなで弔ひをした

「ばん婆ばんばのロザリオはどころザリオを柩に入れて」誰か言ふ声
水甕に溢るるばかり水みたし野辺の送りのしづけさ清む

賛美歌を歌ひてゆける列ながくいのちみちたりこの葬列に
スコップを握る男ら待ちうける土葬のさまの記憶の断片

われを愛で天に召されし曾祖母のわれに残ししやはらかな日よ
あゆみ来るざうりのごとき日和下駄そろりそろりとそうそぼの音

そうそぼの手とわれの手とつながればわが目二人の役目を果たす
そうそぼのうすく小さきたなごころそつと合はざる祈りのフォルム

脈脈と受け継がれ来し言の葉の（ほこらしやかなしや）われもならひぬ
七年の時を経たりて曾祖母の今ひとたびの洗骨の葬

打ち寄する波のきはにて曾祖母をわれも洗ひき白ほねひとつ
はやかはの行くに帰るにとおりやんせ書ゆるめばあの橋わたる

欄干にからすならびてとおりやんせ通さぬ貌のはしぶとがらす